「おい、ツナ。今日の音楽の歌のテスト、随分とお粗末だったじゃねーか」
「だってみんなの前で歌うのって恥ずかし……って、お前何で知ってるんだよ！　いい加減、学校まで来て授業監視するの止めろよな!!」
「うるせぇ！　話逸らすな、このダメツナ!!」
「痛っ！　ちょ、リボーン、蹴……わわっ!?　や、止め……ひい〜!!」

そんなやり取りがあったのが数日前。
「こりゃ特別授業が必要だな」
ようやくお仕置きが終わってホッとしていた時に、リボーンがそうボソッと呟いたのが聞こえてきて、一体今度は何をさせられるんだろうってずっと不安に思ってた。
そしてついさっき、遂にリボーンから宣告されたんだけど……な、な、なんと！　ライブをやらされることになっちゃった!!
しかも、ボンゴレとキャバッローネのユニットとして、ディーノさんと一緒に。
毎回毎回リボーンの無茶ぶりには驚かされてるけど、いくらなんでもこれはとんでもなさすぎ！
ディーノさんを呼んだのは、きっとオレが逃げたりサボったりしないようにするためなんだとは思うけど、こんなことに巻き込んじゃって申し訳ないよ……仕事とかで忙しいだろうし。
それに、ディーノさんと一緒に何かやれるのはすっごく嬉しいけど、クラスのみんなの前で歌うのも死ぬほど恥ずかしいくらいなのに、ライブなんて絶対絶対無理だって――!!

◆

「はぁ……」
無理と思っていても、リボーンの命令だからやらない訳にはいかなくて。
オレは今、ライブの練習のためにディーノさんとカラオケボックスに向かっている。

最初はスタジオ借りてそこでって話だったんだけど、費用はディーノさん持ちって聞いてこれ以上負担かけたくなかったし、何よりオレの歌の特訓がメインなのにそこまでするのはもったいない。
だから、カラオケボックスとかでいいよって言ったんだ。
でもリボーンは、「それじゃちゃんとした練習にならねーだろ。お前らすぐ脱線しちまいそうだしな」って聞き入れてくれなかった。
そこでロマーリオさんが、この前行ったカラオケボックス